

前回紹介した「昔之事話」に続いて「八ヶ條の心間違」があるが、これについては、すでに2011年12月号で紹介している。そこで、その次のところから翻刻を試みよう。

天理教会御話

天理教会奉教主神止申舛ハ、第壹 国常立ノ命、第貳 淤母陀琉 (15才) 命、第参 国佐土命、第四 月読命、第五 豊雲命、第六 阿夜訶志古根命、第六此六柱ノ神様乃御守護有処ノ人間身体六たいと云っているなり。此六柱ノ神様が人間身上御守護に処乃理を以て、陸地斗二六尺を以て一門と云。六拾門を以て一丁と云。六六参百六拾日を以て、壹ヶ年止云。又人間もむね止云。又若 (15ウ) き時ハむす子と云。又娘と云。又此世界ハ西東北南天地、是で六に納り、人間身も六に納り、世界もろんく六くへノ理を以て平かに納るので在舛。此乃通り御定メ被下、御守護在ハ神様乃力。神様ハ天ノ理、天乃理ハ誠で在舛。誠と云ハ一途定メ心がかわらんのが誠で在舛。誠止言ハ神様で在舛。(16才)

続いて16ウ～23ウまで、神功皇后の記事があるが、これについては省略しておきたい。次は「正月話」という題で記されているものである。

正月話

正月にハ何方工行ましても、御目麗たいと申舛して、義を正しく致舛が、神様二ハ御鏡餅を供、又何くの身でも、そふにと申て餅を二切汁二入て祝舛が、是ハそふにを食するのが、在がたいのでハなく、又三日休むのが在がたいのでわ在ません。まったく元々乃里を祝のが在がたいので、此里を思出て祝のか、けんこふて在舛。此里と申舛ハ、正月と云ハ年乃始メ二此世乃始と云ハ (23ウ)

とろ乃海であんた。夫其とろの海中二月日両神様居たと申され舛のて在舛。其月日両神様をかがやき見ると云理を以て鏡と云。其鏡みの餅を二ツかさねて御祭申スハ、こまこい米を数多くあつめ集めて、鏡餅を拵て御供申ハ云ハ、心を寄て一筋の心になりて、月日両神様の御すがたを拵て祭のて在舛。天もまるき地いもまるき。月日様ハまるい。人間心に角がたつてありてハ、世界のりに違うから、まるうてなければ、世界のりと人間心のり違う舛。(24才)

又そふにいと云のハ、とろ海中に月日兩人御こもり在た理によんて、そふに餅二切、又あわもち二切て在。あわのもちあ月様もちわ、月様理であり舛。正月二わ門松をかざり、又夫に竹をそゑ、又目禮たい嫁入しやとか、夫々二とこのまに松竹梅のかざりを致舛。此松竹梅をかさるにあ松を立、又はたに竹を三本そへ立るのである。是を三本の竹と云とわかりません。是ハ三ツの竹、ミ乃たけと云のであると聞ま (24ウ)

した。又人間からだにも松竹梅があるのじやと云事で在舛。人間にわ前に松げと云であるふ。是人間身のたけ共云ハ、せだけと云。又足にむめほしと云。是て松竹梅であり舛。是ハ元々乃りを、ハすれんよふに、嫁入とか、又養子もらうとか、年乃始めとか、皆事乃始めに祝う事で在舛。そこでたがい夫婦のけいやく致た心おわすれさいせねハ、いぬのさるのと云よふな人

間の道おはずす事ハてけません。そこで元々乃理が (25才) かんじゆんて在、又子そだてるのもそのとうり。親ハ子為にさむのにからだを出し、しゝばゝのむさいせわも、むさいとも思わす、子がねとところで、しふべんをすれば、つべたい如い我身ねて、子ハさむかろふかと思て、せわを致す。段々とせだけがのひる。月のまわりに日のまわり、月もよどみて人となる。夫いつと云事なく成長す。是八月日様の御恩、天地の恩、両親様の恩をわすれてしまいます。そこでしといり大きくなりたよ (25ウ)

に思ふてきまゝ、かんしやく、ゑてかんでをして、親の恩、月日の御恩、天地の御恩、皆ハすれてしまいまして、不孝ををあたゑるのであり舛。是と云ハ、元々乃りをわすれてしまいましたからで在舛。此のわすれると云ハ、唯子がわるいのでハない。夫皆めいへ心の心か違ひ、親等の心が違てあんたのじや共、親等が四恩をわすれて通り来る故、親の通り来る道の子か又 (26才) 通るので在舛。なにも親々の心が第一かんじんで在舛。子ハ生立てからハ、親次第。又教育次第で在舛から、なんでも信実まこと通るなれば、其心か天ねんしぜんに子にうつる。子ハ其道をみて行のて在舛。親がいがみかゝみの道をとうり、恩お受た恩をわすれをいて、子にいくらゆうて聞しても、子ハ親の通た道をしんでいる者、馬の耳に風 (26ウ) と聞なかつたわあたりまいて在舛。

よこさまに あるいてみせた 親かにが
まともに行と むりな親かに

かく在舛から、何でも親々様の御心が、かんじんで有舛から、何でも誠真心で通て戴きたいか為、いささかの御取次をさして戴きました事で在舛。(27才)

この話のあとに「おはなし」があるが、これについても、すでに翻刻紹介しているの、ここでは触れない。続く「罪障消滅御話」を翻刻しておく。

罪障消滅御話

御神楽歌に、ヤムホドツライコトハナイ、又、みつのなかなるこのどろを、はやくいたしてもらいたい、と仰せらて有舛。人ハ己の身をかゑりみて、神様の前に犯した罪の大きな事お見出した時ハ殆んど、身も世もあらぬ思がして、悶へ苦しむよふになる者である。印度人の話などに聞いて見ると、罪滅しの為めだと云て、釘打列べたね床の上二横になり、身体を釘に刺れながら、佛をねんする者が有。又、一坪程の地面に限り、其四隅にどんへと火をたきて (32才)

をき、其の中央に設てある席に座んで、のぼせて悶絶する迄、呪文を唱へる者があり、最一ツひどひのハ、丁度田舎の弾釣瓶〈ハツバ〉のよふに、丁の字なりの木を立て、其横木の一端〈カハ〉にかぎを掛け、かきの先お人間のせなかに突刺し、横木の一端にハ縄お結付ておいて、一人の人が其縄お引張りたり、伸したりすると、其度毎に釣〈ハ〉に掛られている人が、忽ち空中高く引上られ、又忽ち地上にひくゝ釣おろされる。此うして身上を上たり下たりされる間だ祈祷おするのが (32ウ) 罪滅ぼしの一方だと心得ているとのことと有との事。我朝に於

て彼の袈裟御前を殺して後に、発心した文覚上人が二週間（7 月 27 日）の間、裸体で竹藪の中で蚊に喰はれ、又那知の瀧に打れ、荒行をしたと云様な例ハ、随分世に少ない事でない。此世に人ハ、其犯した罪の容易ならぬ事おさとる時ハ、何とかして之お赦されたい者である。色々の難行苦行をする者もあれば、牛羊などお殺して、其を犠牲にして罪の赦されん事願ふ者もある。又罪を悔むのあまりに出家して、山寺に引込む者もある。又、托鉢僧（33 才）

なる者もある。其他堂堂を建立し施與をし、だん食祈禱おしい、お百度日参巡礼おするなど、何処の国にも昔例しのある事である。然りながら、世を棄て山に入る人、山にてもなお憂き時ハいつち行くらむ、と云歌がある通り、人わ山寺にいつたからと云て、更で安心立命おられる者でない。又ハ難行苦行施與いけに糸などふの仕方二よりてわ、罪惡のけされる別の者でない。人の罪惡の赦す者ハ、唯神様の靈救お受け、天理人道に基いて宇内通行（33 才）

の教お聞き給布教祖の靈力のみである。天の眞の神様ハ人間が重々の罪を犯し、悔めとも甲斐なくもかけども、自分の身体救ふ力はなく、「みづのなかなる此どろおはやくいだけてもらいたい」と、ひた苦しみに苦しんでいる有様おみて、是おぶふんと思召し、今日より百六年の昔、天地創造の始メの約束に基き給て、教祖を大和の地場に降し給て、八拾九年長き月日の間、此世に存（か）らつて、靈救一条の有難い教を説き、尊貴模範を垂（34 才）

させた後、元の御膝元に呼び返し給りましたが、此後ハ即ち人ハ如何に罪深い者でも、最早何等乃難行苦行するに及ばず。又ハ施與によりて自分を贖（あが）ふまでも無、唯眞実から是迄に犯せる罪お悔改めて、只一筋に教祖にもたれすがりさいすれば、神様ハ教祖の御丹精を愛で賜て、すぐに我等の凡ての罪を皆赦し下さる事二成すたので有。即ち御樂歌に、あしきを払ふてたすけせき（34 才）

こむ一れつすましてかんろふたい、と教えられたのハ此理で有。

此借錢ハ誰が払

或時、ロシアの国に一人の兵卒があつて、一夜机の前に座りて、鉛筆を手に持、借ている借錢の高を勘定していました。計算して見と、なかへ大層な金高であるから、何ふ勘が糸ても一兵卒の身分として、是お支払う見が立ません故、なかへ思安にくれて、やがて総勘定の後の処糸、此借錢ハ（35 才）

誰が払のであると書たま時間が来から、ね床にねた。そふしますと其後ロシアの天子ニコラス陛下二ハ、微行（シバアル）きをして、右の兵卒の居処御出二なり、深更二あちらこちらと部屋々お御巡回になりました。忽ち有兵卒兵卒の机の上に、何か書付が認である。ふと御目かとり、手に取上て、御らん有と、是ハ借錢の計算書であるが、中程迄読終り、さてへ一兵卒の身分で大層借をこしら糸た（35 才）

者で有。又終りに、此借ハ誰が払と書てある。是面白い。朕が一つ払てとらせよと思、有合せた鉛筆で、其後の処糸ニコラス

と御自分の名お御認になり、其まへ御返りになり舛した。翌朝になつて、其兵卒、軍服を付てから何気無く夕べの書付見と、是ハ不思議、此借錢ハ誰が払布と書た後い、夜乃間に誰か見なれぬ手迹でニコラスと書てある。奇休な事やな、あればあるものと、ひとり私かに疑ひ惑ふている、とうの日の内に（36 才）突然、天皇陛下から御使が立ち、特旨を以て、右之兵卒に対し、丁度、借金に払に足だけの金額を御下賜になつたので、兵卒ハ夢かと計に驚き喜び、さてわ夜前、我が部屋に来て、我書付の終りにニコラスと記名したまふたハ、畏多くも、我一天万乗の天皇陛下で有たかと、手の舞足の路ところお忘れて、狂ひ廻つて陛下の御仁徳を吹聴して歩いたと云話が有。今我々共人間が（36 才）

神様の前に重々の罪お犯して、自分で是お救ふに由なし。如何ともいたしやうのない有様に陥入している時、神様が原始の御約束二基きて、教祖お此世に御降シなり、其天理の實行を以て、罪お御救ひ下さるゝ事になりたのわ、聊か前の話にゝた事有から、即ち一天万乗之天皇陛下が借錢お、御出でに成、払布て御やりなされた如く、尊貴教祖があれれみて、我々乃罪惡を御助け（37 才）

降さるのハ、前の一兵卒の如に、みによるコバねバならんのであり舛。大恩ハ忘れてハなりません。

次に翻刻するものは、こうした文書にときどき見かけるものであるが、その出所はよくわからない。いままで翻刻紹介しなかったのは、その故である。ただ明らかなのは、教祖がおつくりになったものではないということである。一説によると、こかん様がお書きになったのではとも仄聞するが、やはり不明としかいいようがない。

御樂歌

- 一ツ ひのもと大和にて 山辺郡正屋敷ナリ
- 二ツ ふしきこ乃度生子に あた糸あるとわめつらしい
- 三ツ 三日めよりかんろふが 天よりをりたというわいな
- 四ツ 世に降りたるかんろふが 寿命業となるほどに
- 五ツ いつも業が有かいな これが先なるためしやで
- 六ツ むねのわかりたしよこふに 天のあた糸があるのやで
- 七ツ なにガ天理にかのふたら めつらし助がある者や
- 八ツ 屋敷の内糸とはいるなら いかなる者もこいしなる
- 九ツ こ乃たびまでいしらなんだ 元なるじばや親さとや
- 十ド こ乃たびいちれつにこきよふ たつねてくるハいな
- 一ツ 広く門よりさしかけて ほんやのもよふせにやならん
- 二ツ ふしんするなら地とりから
みさだめつけにやいかんでな
- 三ツ 見ればよふバガじやまになる
とれいなおしてよかるふぞ

こうしたお歌が三下り分続く。（後は省略）

* 史的文書のため不適切な表現もそのままに翻刻していることをお断りしておく。